

Megumi Kanda

ミルウォーキー交響楽団
首席トロンボーン奏者
神田めぐみ

1975年名古屋生まれ。6歳からピアノを始める。10歳で小学校のブラスバンド部に入部。13歳からトロンボーンを三輪純生氏に師事。1991年桐朋女子高校音楽科に入学。93年第1回日本トロンボーン・コンペティション1位。アジア・ユース・オーケストラに参加。94年桐朋女子高校を首席で卒業し米国に留学。クリーブランド音楽院でジェームス・デサーノ氏に師事。97年同院を首席で卒業。アルバーニ交響楽団首席を経て2000年にロチェスター・フィルに移籍。イーストマン音楽学校で指導にも当たる。2002年ミルウォーキー交響楽団首席に就任。リサイタル、コンチェルトなどのソロ活動、マスタークラスも活発に行い、国際トロンボーンフェスティバルにも定期的にゲスト出演。ビクター・エンタテインメントからソロアルバムを3枚リリース。著書にトロンボーン教本「Trombone Unlimited」、オーケストラスタディ教本「The One Hundred」などがある。3男と3匹の猫の母。夫はミルウォーキー響ホルン奏者。趣味は庭仕事。使用楽器は Greenhoe GC4-1R。



神田めぐみさんに聞く 「頑張りすぎない」 練習法

効率良く
練習するための

とっておきの

アドバイス!



神田さんのオーケストラスタディが今では全米で使われるほどに、その指導法にも注目が集まる存在。学生時代に「頑張りすぎて」吹けなくなるスランプに陥り、そこから立ち直った経験が氏のユニークな指導法を築き上げた。

3回に亘る連載の今回が最終回。

撮影：岡崎正人 協力：株式会社グローバル



かつての同僚だったゲイリー・グリーンホー氏と。

バルブの素晴らしさに注目したシルキー社が
グリーンホーを買収して完全自社生産。

グリーンホーの
何が良いのか？

——神田さんがお使いのグリーンホーは、いまシルキーで作られていますね。

神田 グリーンホーさん（ミルウォーキー交響楽団のトロンボーン奏者で神田さんの同僚だった）はもともとバルブだけを製作し、ベルはコーンやバック、リードパイプはコーンのものを使って組み立てていたんですが、バルブの素晴らしさに注目したシルキー社が後に買収しました。それと同時に、グリーンホーさんの所にいたブライアン・ラッセルという技術者がシルキーに移って仕事を引き継ぎ、現在はグリーンホー・バルブだけでなく、ベルやスライドまですべてシルキーで手作りしています。

——神田さんの楽器もシルキーで作られたもの？

神田 そうです。ベルはドイツから輸入



グリーンホーの音はカラフルで倍音が豊か。
息抜けが良くてF管でも違いが分からない。

いくらい。バストロンボーンなどバルブを2つも組み合わせてますから、特にその違いの大きさにはみんな驚きますね。うちのオケ（ミルウォーキー交響楽団）のバストロの人はバルブ大好き人間で、バルブの組み合わせの研究ばかりやってますけど笑、グリーンホーのバルブはピカイチだと言ってます。

——機構的に何が違うのですか。
神田 写真を見れば分かりますが、ロータリー

お勧めしたいグリーンホーのオプション

——左手の親指を支える棒……。

した金属を使っているのだとか。グリーンホーさんも最後の頃はベルを手作りされていたいました。

——とても薄いベルですね。

神田 超薄い！ 楽器を持つと「軽っ！」とビックリしますよ。シルキーだからこそ出来るんでしょうね。グリーンホーには私が使っている「エルクハートスタイル」の他に「ニューヨークスタイル」というバック・タイプのモデルもあります。もちろんバックとは響きが違います。

——神田さんがお使いのエルクハートスタイルのベルはレッドプラス（ニューヨークスタイルはイエロープラス）の、いわゆるコーン・タイプですが、グリーンホーを使う前はコーンを使っていたら？

神田 ええ。コーンの前はベンジ、その前はバック、小学生で吹き始めたときはヤマハ。高校卒業後にクリーブランドに

留学しましたが、向こうに行ったらバックよりベンジの方が温かい音に感じるようになった。それでベンジに変え、その後、コーンの方が音がフォーカスされていると思えたのでコーンに変え、さらにグリーンホーの方がもっとフォーカスした音が出ると感じて、今はグリーンホーに落ち着いています。何と言ってもグリーンホーは音がカラフルですからね。倍音がすごく豊かなんですよ。

——グリーンホーを使う人は増えていきますか？

神田 増えてますよ。アメリカ、ヨーロッパ、スウェーデンあたりは特に多いですね。——グリーンホー・バルブの良さはどんなところ？

神田（操作時に）音がしないのも凄いです。何よりも息の抜けがとってもいいんですよ。F管でも全く違いが分からない



グリーンホー・バルブのロータリー。航空力学に基づき工業デザイナーのビル・サンダースと共同開発された。気密性が最大限に高められており、またバルブポートを太くし軽量化設計することで、スタイリッシュな外観とスムーズな吹奏感を実現。



私は20代の時から演奏していて左手の感覚が無くなっていた……

神田 わたし、これ無しでは生きていけない(笑)。

——標準で付いているんですか？

神田 標準ではなく、グリーンホーのオプションパーツとして買えます。このパーツを付ける前、私は演奏中に左手の指の感覚がなくなっていました。トロンボーンは重いから、手の感覚がなくなってしまう人は多い。

バストロンボーンなんか特にそうですね。友だちのダグラス・ヨーさん(元ボストン響バストロンボーン奏者)は手の手術をもう15回もやられたとか。このパーツを付けば楽器の重さ(バランス)を分散できるので、バストロンボーンにはほとんど標準装備されています。

このパーツはいろんな所から出てますが、グリーンホーのものが一番手に優しい



バルブキャップをオプションで透明のシースルーキャップ(写真右のキャップ、左は標準の金属キャップ)にすることも可能。バルブのトップに施された美しい彫刻が浮き立って見える。

く感じる。ハンダで付けちゃう人もいますが、私は面倒で付けてません。

ただ、日本ではあまり広まっていないようですね。グローバルさんにお聞きしたら、楽器自体が軽いし、日本人はあまりこうしたパーツを付けたがらないと……。皆さん自分の身に障害やトラブルが発生して初めて考えるのかな。

私の場合は20代のときから、演奏していて左手の感覚が無くなっていました。そうなるまで待つてからでは遅い。予防的に若い時からでも利用した方がいいんじゃないかと思っています。

——神田さんのバルブキャップは透明ですね。

神田 これもオプションで手に入るシースルー(透明)キャップ。標準は真鍮製です。この透明部分はレキサンというポリカーボネイト製です。軽くなって反応や音の立ち上がりがより速くなる。

標準の金属キャップだと見えませんが、じつはバルブ本体のトップには彫刻が施されていて、透明キャップを付けると中の彫刻が見えて素敵なんです。こうした細かなデザインにもグリーンホーさんのこだわりが見えます。昔からドイツの楽器や工芸品的なものが好きで、楽器の管をつなぐ洋白部分のパーツにラインを入れたのもドイツ的ですよね。



レキシントンの
コンセプトは歌

——いろいろお聞きしましたが、最後

神田さんは左手の負担を軽減するため親指を支持するオプションパーツのサムレストを愛用している。「私はこれがないと生きていけません！」



に神田さんのルーツとも言えるレミントンについてお聞きします。米国のトロンボーン界に大きな影響を与えたレミントン・スクールとは、何が一番の特徴なのでしょう。

神田 レミントンのコンセプトは、すべて「歌う」ということです。レミントンさんご自身、小さい頃は少年合唱団などに入っ

て歌っていた。現在の一時代前の偉いトロンボーン奏者たちはほとんどがレミントンさんのお弟子さんたちで、レミントン以外のスクールもありましたけど、イーストマンで教えていらしたレミントンさんのスタイルが主流でした。

当時の写真を見ると、こんなに上手な人たちが一つの学校にいていいの？と思うくらい壮観です。グリーンホールさんもレミ

ントンの生徒ですし、ラルフ・サウアーさんや私の先生でクリーブランド管弦楽団首席だったジェームス・デサーノ先生もそうです。面白いのは、仕事でそうした人たちと一緒に吹くと、吹いたあと顔を見合せて、「やっぱりそう吹くべきだよね」と。

——吹き方が共通する？

神田 そう。声を出すように吹くとか、力を入れないでリラックスして歌うように

リップスラーなどはレミントンさんがやり出した。トロンボーンのスラーの吹き方も彼が変えたようなものです。



音を出す。音の形も「パーアー」じゃなくて「パン」と音を抜くとか。

トロンボーンでのスラーの吹き方も、レミントンさんが変えたようなものです。それまであまりやられていなかったリップスラーなどは、レミントンさんがやり出した。これは画期的でしょうね。

——リップスラーを使う意味はどんなところに？

神田 リップスラーをやると、息の支え

がしっかりします。しっかりしていないと出来ない奏法です。それがスムーズに歌う奏法に繋がります。

——より滑らかに吹く方向にどんどんなっていた？

神田 そう、滑らかに、声楽的にと……

★神田さんの教本！

※「風の音ミュージックパブリッシング」で取り扱い。

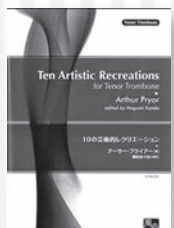


『trombone unlimited』

(日本語訳ブックレット付)
記事で語っているような独自のアイデアが随所に盛り込まれたトロンボーンの包括的な教則本。

『the one hundred』

(日本語訳ブックレット付)
トロンボーンの新しいオーケストラスタディ教本。今では全米の音楽学校で使われているベストセラー本。



『Ten Artistic Recreations』

アーサー・ブライアー著／神田めぐみ校訂
ブライアーが遺した自筆のエチュードを半世紀以上の時を経て復刻。テナートロンボーン版、バストロンボーン版、ユーフォニアム版がある。



やはりトロンボーンの世界史を変えた立派な先生ですね。ゲイリー（ゲリン・ホー氏）とは40近くも歳が違っていましたけど、同じ先生の流れて習っているの、一緒に演奏していて互いに「私たち兄弟」みたいな親近感がありました。

——今の若い世代の人たちはどう

なんですか？

神田 今はアレッシェさんとかが主流かも知れませんが、もつといろんなスタイルがありますね。

——ヨーロッパなどは？

神田 どうでしょう？ ヨーロッパがどうなのかは、あまり考えたことがないですね。私は私で、レミントンの流れを汲

んでいるとはいえ、自分なりにこれだと思ふことをやっているだけです。

——本当にいろんなお話を伺うことが出来ました。ありがとうございます。

神田 ずいぶんディープなインタビューになりましたね。トロンボーンに限らず皆さんの参考になればとても嬉しいです。

◎編集部より前号の訂正

前号(P.18)でアーノルド・ジェイコブス氏は「片肺を切除して、肺が一つ」だったと述べていますが、信頼できる資料([Song and Wind])によると、片肺は一部切除されてほぼ機能しない状態でしたが、肺は2つ残っていました。ここで訂正させていただきます。読者からご指摘を頂戴しました。